

日本ラテンアメリカ学会

会 報

No. 3

1981年3月1日

第3号 目 次

1. 理事会報告
2. 学術・文化情報
3. 会員活動報告
4. 新書紹介
5. 事務局から
ラテンアメリカ研究センター
めぐり

1. 第4回理事会報告

1981年1月17日、10名の全理事出席のもと開催され、理事長による事務局活動報告の後、年報第1号・1981年度大会等についての審議を行った。

第3回理事会以降の事務局の主要な活動は以下の通りである。1) 会報第2号の発送、2) 第1回定例研究会案内の発送、3) ベネズエラの歴史学者サルセード・バスタルド氏との懇談会開催、4) ベルーの歴史学者ホルヘ・バサドレ博士追悼講演会開催、5) 政府関係機関・民間財団への外国人研究者招聘申請、6) 研究連絡のための科研費申請(但し、この種の研究連絡に関する諸方面からの意見を聴取した所、最初から大規模な形をとることは無理であることが判明したので、今回は一応学会とは別個に、22名の個人的参加を得て、東大を通して申請することにした。これが実現すれば、それを足場に全学会規模での研究連絡組織作りに進む)。

審議事項は以下の通りである。

- i) 入会を希望した7名(うち1名は準会員)について書類を検討した結果、全員の入会を承認した。賛助会員として入会を希望した二社の入会も、あわせて承認した。会員の積極的な募集をひき続き行うことを見た。

した。

- ii) 渉外関係では、日本学術会議の登録学会になるための準備を進めること、学会名入りの便箋・封筒を作成すること、LASA大会への代表派遣を考慮することを決定した。
- iii) 会報第3号は、第2号とほぼ同様の構成をとるが、2ページ増やして10ページにする。将来、欧文ブリティンの年一回発行をめざすことを決定した。
- iv) 年報第1号は、1981年度大会時に配布できるようにする。創立直後の特殊事情と時間不足のため、今回は論文の公募をせず、創立大会・定例研究会での講演・報告を中心編集する。第2号以降については、市川正巳、木田和男、加茂雄三、木村栄一、友枝啓泰の各氏に編集委員になるとを依頼し、この編集委員会が1981年度大会の際に会合して、基本的な編集方針を定めることとした。
- v) 第2回定例研究会は、東日本部会を、寺田和夫氏を報告者として、4月18日に開催する。西日本部会については、報告者未定であるが、4月もしくは5月に開催する。なお、西日本部会の運営委員として、松下洋氏(南山大学)の協力を得ることにした。
- vi) 1981年度大会については、4月11日に予定されている第5回理事会開催まで、増田理事長、石井理事、アンドラーデ理事、大貫運営委員、恒川運営委員よりなる臨時準備委員会が編成の任にあたる。分科会は、正式の大会報告希望を募った上で、組織方法を決定する。シンポジウムは、「1980年代のラテンアメリカ」及び「わが国におけるラテンアメリカ研究と教育」に関連するテーマを扱うが、具体的な編成は上記準備委員会が行う。

ラテンアメリカ研究センターめぐり (2)

国立民族学博物館

国立民族学博物館（略称 民博）は世界中の文化を展示・研究の対象にしており、ここにラテンアメリカ研究センターがあるわけではないが、研究部にはラテンアメリカ研究者が併任を含めて8人在職しており、展示・研究活動に従事しているので、以下に紹介したい。

民博は世界の諸民族についての資料を収集、保管し、一般の観覧に供するとともに、民族学に関する調査・研究を行うことを目的としている。同時に、国立大学の教員その他の方で民族学の研究に従事する人が利用することができる国立大学の共同利用機関である。ラテンアメリカ関係の研究者は原則として、第4研究部：アメリカ、オセアニアに所属して、現在のところ、次のような展示・研究活動を行っている。

○展示

展示は地域展示とクロス・カルチュア（通文化）展示で構成されており、ラテンアメリカの展示はアメリカ展示の一部をなしている。アメリカ展示のテーマは古代アメリカ文明、アメリカ原住民の生活、現代アメリカの三つで構成されている。ラテンアメリカ関係では、中央アンデス高地とアマゾン流域がとりあげられているが、近い将来アメリカ展示が拡大される折には、収蔵中の中米の資料を公開する予定である。

○ビデオテーク

民博が開発したシステムで、世界の諸民族の多彩な生活実景を映像で提示し、さらに、テープで音楽・言語を紹介している。ラテンアメリカ関係のビデオは39本、音楽・言語テープは2本ある。

○教育・普及活動

民族学ゼミナールがあり、学生・一般社会人を対象に「みんぱくゼミナール」として研究部の教官が月1回講義を行っている。

○公報・出版活動

研究連絡誌として「民博通信」（季刊）、広報普及誌として「月刊みんぱく」、展示解説として『国立民族学博物館総合案内』があり、入館者案内としてリーフレットが日本語と英語で出版されている。

○図書室

一般公開されてから年月が浅いため、図書の整理が不充分で、利用上の不便が若干あるが、ラテンアメリカの民族学関係の蔵書は豊富である。とくに、ライヘル・ドルマトフ文庫に加えて泉靖一文庫があり、今では入手困難な1930～40年代の書物や抜刷がかなりそろっている。近年の出版物は欧米ならびに現地出版のものもこまめに入手しているので、ラテンアメリカの民族学関係図書館としてはかなり揃った図書館となると思われる。特に、アンデスとメソアメリカの書籍が充実していると思われる。また、内外の雑誌のバック・ナンバーは数多く、全国の研究者の役に立っている。

○研究活動

研究活動は各個研究と共同研究とにわかれ、各研究者は共同研究に属したり、コーディネーターとして活動し、共同利用機関の研究員としての機能を果している。ラテンアメリカ関係では共同研究『アンデス農牧社会の民族学的研究』があり、同研究グループは文部省科研研究費をえて、組織的なアンデス研究を推進している。

○研究関係出版活動

各研究者は研究成果を和文の『国立民族学博物館研究報告』（季刊）と欧文の Senri Ethnological Studies（逐次刊行）に発表している。

○国際シンポジウム

年1回開かれ、1980年12月には第4回のシンポジウムが「中央アンデスの人間と環境」というテーマで開催され、ペルーとアメリカ合衆国の研究者の参加をえ、成功裡のうちに終了した。

○研究員（令順）

大給近達 教授	（文化人類学）
友枝啓泰 助教授	（文化人類学）
黒田悦子 助教授	（文化人類学）
藤井龍彦 助教授	（文化史）
山本紀夫 助手	（民族植物学）
人杉佳穂 助手	（言語学）
増田義郎 教授	（文化人類学）併任
佐藤信行 教授	（文化人類学）” （黒田悦子 記）

2. 学術・文化情報

i) サルセード=バスタルド氏との懇談会
ベネズエラ中央大学教授ホセ・ルイス・サルセード=バスタルド氏と本学会員との懇談会が昨年11月21日(金)午後4時から2時間に渡り国際交流基金事務局会議室で行なわれた。

ii) A・G・フランク講演会

「フランク理論」の名で知られる独特の第三世界論を展開してきたA・G・フランク氏(ドイツ生れ、現在イギリス在住)が来日された。周知のように、資本主義諸国による第三世界従属諸地域にたいする支配・収奪関係を基軸として世界の近現代史を解明しようという氏の方法論は世界の第三世界研究に大きな衝撃を与えた。

東外大の海外事情研究所は11月28、9の両日、同氏をお招きして講演会を開いた。1日目は「現代の危機」をテーマに、現代の世界経済危機が第三世界においては強権体制の頻出を促していることが指摘された。また2日目は「世界蓄積経済史」のテーマにしたがって、世界資本主義と低開発の形成・発展史が15世紀以降の「好況-危機」のサイクル運動を軸に語られた。

同講演会には多数の学生の他に、毛利健三氏(東大社研)、フランク近著の訳者吾郷健二氏(西南学院大)も参加され、一層有意義な集いとなった。
(高橋正明 記)

iii) ホルヘ・バサドレ追悼講演会
本学会とペルー大使館共同主催のもとに、12月17日(水)午後6時より、神田一ツ橋学士会館で開催された。

ペルーカトリック大学歴史学科フランクリン・ピース教授による「ホルヘ・バサドレと現代ペルー史学」と題する報告があり本学会員及びペルー大使館員、在京ペルー人、ラ米各大使館員等の参加があった。

iv) 「ラテンアメリカ社会階級」と題するシンポジウムが、上智大学イペロアメリカ研究所の主催で本年1月31日に同大学で開かれた。アルゼンチン、ブラジル、チリおよびメキシコの4カ国がとりあげられた。

v) 筑波大学ラテンアメリカ特別プロジェクト主催で、下記の講演会が開かれた。

2月5日「教会と大衆」Ferreira de

Camargo教授(Universidade Católica do São Paulo)

2月12日討論会「ラテンアメリカ都市研究の動向について」

vi) 第44回アメリカニスト会議

1982年9月5-10日イギリスのマン彻スター市で開催される。問い合わせ先
44th International Congress of Americanists, University of Manchester, School of Geography Mansfield Cooper Bld., Manchester M13 9PL, England

vii) ピッズパーク大学ラテンアメリカ研究センター招聘教授および研究員募集

同研究センターは Andrew W. Mellon 基金により 1981-84年にかけて毎年各1名づつを受入れる。国籍不問。〆切4月1日。詳細は下記に問い合わせ下さい。

Center for Latin American Studies 4 EO 4 Forbes Quadrangle University of Pittsburgh PA 15260, U. S. A.

viii) 『ラテンアメリカ文献目録: 1979』が上智大学イペロアメリカ研究所より出版された。一般￥800、学生￥600

ix) アンデス・シンポジウムについて

会報第2号でお知らせしたように、「中央アンデスの人間と環境」に関するシンポジウムが、1980年12月20~25日、吹田市の国立民族学博物館および東洋レヨン求是荘において開催された。参加者および報告テーマは下記の通り(発表順)。

増田義郎「中央アンデスにおける動態的地域間関係」、アレハンドロ・カミーノ「南部ペルー、アンデス東斜面の一地域社会における自給農耕戦略のための時間・空間利用」、山本紀夫「中央アンデス東斜面における環境利用」、ホルヘ・フロレス・オチャオ「アルパカと羊の牧畜-その空間分布の現状の社会的・文化的・歴史的原因」、フランクリン・ピース「ペルー南部の高地と海岸における民族集団間の関係-その形態の持続と変化」、スザン・ラミレス=ホートン「ペルー北海岸の経済組織についての考察」、イズミ・シマダ「北部ペルーにおける海岸・高地の交渉-考古学的見地から」、大貫良夫「ペルー、ア

ンデス中北部における環境利用の先史学的展望」、ルイス・ミリョネス「海岸の偶像崇拜と高地の偶像崇拜—宗教の二重の変容過程における相互依存と対遡性」、友枝啓泰「アンデスのフォークロアとアマゾンの神話」（以上、山本、シマダ、ラミレスの報告は英語、それ以外はスペイン語）。なお、シンポジウム5日目に、筑波大学の川喜田二郎氏による、ヒマラヤの環境利用に関する特別レクチャーが行われた。

X) 地域研究に関するコロキウムの開催

わが国の大学、学術機関においては、地域研究の体制がまだきわめて未発達な状態にあると言わねばならないが、1980年1月29日付で、学術審議会の学術国際交流特別委員会が、審議まとめの中で、地域研究の推進を強調しているのが注目される。同報告書によれば、「中近東、ラテンアメリカ等從来、我が国として、地域研究としての学問的蓄積の殆どなかった地域については、重点を置いて研究の推進を図る必要があり」、そのため「科学研究費補助金等により地域別の研究者グループの育成を図り」、研究機関の充実、新設、現地調査の援助、若手研究者の現地派遣の拡充等を考慮する必要がある、とある。

1981年2月21日（土）、東京外大アジア・アフリカ言語文化研究所において、海外学術調査総括班主任による、海外学術調査コロキアム「地域研究—現状と問題点」が開催され、東南アジア、西アジア、南アジア、アフリカ、オセアニア、中南米の研究者数十名が招かれて、分科会討議、総合討議に参加した。地域研究の活発化のために、海外学術調査は重要な意味を持つので、この種の会合は多くの研究者から希望されていたものであり、また上記学術審議会の結論を今後さらに実現にむかって前進させるためにも、きわめて有意義であった。本学会からは、近藤典生、増田義郎、染田秀藤、恒川恵市、原田金一郎、細野昭雄、山崎春成が参加し、さらに田中正武（京大農学部）、本間長世（東大教養学部）の2名が分科会討議に加わった。中南米分科会の結論は、増田が総合討論会において報告したが、その要旨は次の通りである。

- 1) 中南米の地域研究はひじょうに遅れており、今年度の科研費海外調査の配分を見

ても、中南米地域に関して認められたのはほとんどが自然科学部門であって（会報第2号参照）、人文・社会科学部門はこれまでほとんどなかつたのが現状である。

2) 人文・社会科学部門の研究も、出版された資料・統計などにもとづくデスクワークから、地域社会に参加して観察調査をおこなう、いわゆるフィールドワークを必要とする時期に来ている。中南米でも、これから人文・社会科学部門の海外調査が活発に行われることがのぞましい。

3) 人文・社会科学部門の地域研究においても、環境衛生学、予防医学、生態学、農学、植物学、自然地理学等、人と環境の問題を考える上に協力を求めねばならぬ学門分野が少くない。

4) 科研費の審査部門に、学門分科別の区分だけでなく、「地域研究」という部門を設けてもらいたい。

5) 学術振興会がテヘラン、ナイロビに設けているような出張所が中南米にも必要である。

6) 地域研究の基盤となる中南米研究のための施設を研究機関にふやさねばならない。

XI) 訪日者リスト

＜国際交流基金＞

- Francisco Amighetti (コスタリカ)
国立美術館名誉館長 80年5月5-26日
- H. G. Cunha Palente (ブラジル)
リオ・デ・ジャネイロ連邦大学文学部長
6月6-20日
- Estela Okabayashi Fuzii (ブラジル)
ロンドリーナ州立大学教授 9月-10月
- Luis Mashiro Hanada (ブラジル)
日伯文化連盟議長 10月6-22日
- Margarita López Portillo (メキシコ)
メキシコ・テレビ・ラジオ局長官
9月30日-10月4日
- Héctor Manuel Ezeta (メキシコ)
文部省人材局長 9月17日より2週間
- Orlanda Towa Yokohama de Fernández (アルゼンチン)
国立東洋美術館長 10月3日-11月1日
- Luis Alberto Aguilera Ponce (パナマ)
国立美術学校教授 10月27日-11月10日

- Guillermo Tutzeys Alvarez (グアテマラ) デル・バリエ大学教授 12月 5 - 8 日
- J. L. Salcedo-Bastardo (ベネズエラ) ベネズエラ中央大学教授 11月 15 - 27 日
 <外務省>
- Antonio Barente Netto (ブラジル) アマゾネス州データー処理公社社長 80年 11月 6 - 18 日
- Fernando Paredes Pizarro (チリ) 国防省捜査総局長 11月 10 - 12 日
- Edmundo Morgan (パナマ) 大統領特使 11月 23 日 - 12月 2 日
- Gregorio Báñer Onjas (メキシコ) 人間居住公共事業省次官 11月 22 - 28 日
- Alfonso Labardo (ベネズエラ) 国立石油公社社長 11月 13 - 21 日
- Enrique Ojeda Norma (メキシコ) 会計検査院長 81年 1月 16 - 23 日
 <筑波大学>
- Luis Unikel (メキシコ) コレヒオ・デ・メヒコ教授 81年 1月 30 - 2月 13 日 (過去のため中止)
- Cândido Procópio Ferreira de Camargo (ブラジル) サンパウロ・カトリック大学教授 1月 19 日より約 6ヶ月間
 <その他>
- Michiko Tanaka de Saldivar (メキシコ) コレヒオ・デ・メヒコ教授 80年 12月 - 81年 1月
- Americo Saldivar (メキシコ) UNAM教授 同上

3. 会員活動報告

i) 第1回定例研究会東日本部会が、1980年 11月 15日午後 2時から、アジア経済研究所役員会議室で開催された。

テーマ、報告者および報告要旨

1. アルゼンチンの労働運動とペロニズムの形成(1930~1945)：松下洋氏(南山大学) 報告者は、初期ペロニズムと労働運動との関連をめぐる解釈論として、Germani の正統派解釈とそれに対する修正主義派解釈を紹介した後、労働運動のイデオロ

ギー的側面、とくにサンディカリズム、VC焦点を合わせ、ペロニズムと労働運動の関連を論じた。

2. La generación argentina de 1837 y el romanticismo político

松下マルタ氏(南山大学) イスパノ・アメリカにおいてロマンティシズムは、ヨーロッパのそれのようにたんなる文学、芸術上の潮流ではなく、一つの世界観として同時に文学、政治の両域にかかわる問題であるという認識に立って、アルゼンチンの1837年世代にはじまるロマンティシズムを、政治上の保守主義とリベラリズムとの対抗との関連で論じた。

両者ともアルゼンチンのCuyo大学に提出した博士論文のテーマに基く報告で、たいへん内容の充実したものであった。活発な質疑応答が行なわれ、予定を1時間超過した5時半に閉会した。出席者は、報告者を含めて17人。

(石井 章)

ii) 西日本部会の第1回定例研究会は、1980年 12月 6日(土) 午後 1時半から、大阪市立大学田中記念館で開かれ、28名(うち非会員6名)が参加した。京阪神だけでなく、名古屋、広島、東京の会員の参加もあり、盛会であった。山崎春成理事(大阪市大)の挨拶ののち、友枝啓泰(民族学博物館)、吉田秀太郎(大阪外大)、原田金一郎(大阪経済法科大)の3会員から研究報告があり、5時すぎ閉会した。

友校会員の報告「ラテンアメリカにおける民族学研究の現状」は、ペルーにおける1940年代以降のインディオ社会の民族学的研究の動向を跡づけたのち、インディオ社会が急激な変化の過程に入っている現在、その研究にも種々の新しい視角や接近方法が必要とされる状況となっていることを明らかにした。

吉田会員は「ラテンアメリカ文学とナショナリズム」を主題として、スペイン文学の模倣から出発して他のヨーロッパ文学にも眼を広げつつラテンアメリカ文学が創成されてくる時期から現代の世界的ブームに至るまでの過程を概観し、その過程でのナショナリズムという要因の重要性を強調し、この見地からすればまだ日本に紹介されていない重要な作家・作品が多くあることを指摘した。

原田会員の報告「マリアテギにおけるイン

「ディヘニスモとマルクス主義の合流」は、インディヘナ問題の歴史的展開にふれたのち、この問題ととりくんだマリアテギの思想形成過程およびその独自の思想の評価について、いくつかの論点を提起した。

以上の各報告に対して若干の質疑・討論がおこなわれたが、時間の制約で十分展開されるに至らなかつたことは残念であった。ラテンアメリカという共通項をもちながら専門領域は多様にわかれている本学会の研究会あるいは大会のもち方については、いろいろの工夫が必要とおもわれる。会員諸氏からの積極的御意見を期待する。（山崎春成）

III) 國際地理學會議に出席して 宮井 隆

1980. 9.1~9.5 第15回國際地理學連合總會および第24回國際地理學會議が東京で開催された。地理學關係の國際會議は1957年東京と天理で地域會議を開いているが、包括的な國際會議としては我が國で始めてであった。日本都市センターと付近のビルを会場として、海外80カ国約1000人、我が國1000人の参加者があった。自然から人文までの12のセッションによる研究発表、3つの総合シンポジウム（日本文化、気候変動と食糧生産、環境としての自然災害）、その他国連大学とのパネルディスカッション等が行われた。期間中地図展示会を国会図書館、サンシャインビルで持ち一般公開された。詳しくは雑誌「地理」1981年1月号、「民博通信」1980年第11に紹介されている。ラテンアメリカからは7カ国約40人が参加、シンポジウムではメキシコのセルバンテスとメサが気候変化と地生態系環境の不均衡について報告またセッションでは学問水準を反映して自然部門での発表が多かったが、人文部門ではメキシコ、ブラジルの都市、人口問題、ブラジルのベルギー移民、ボリビアの人口移動、メキシコ北西部の地域発展等が扱われた。また本會議の前後ワーキンググループ、エクスカーションがあり、現地討議を行ない海外の学者との交流を深めた。

将来、学会の便箋・封筒や発行物に使用するシンボル・マークを会員の皆様から募集することになりました。ラテンアメリカにふさわしい図案のアイデアを、是非事務局までお寄せ下さい。

IV) ラテン・アメリカ政経學會に出席して 乗 浩子

1980年11月8~9日、第17回 ラテン・アメリカ政経學會がアジア經濟研究所で開催された。総会にひき続いて行われた研究報告では、「メキシコ革命と銀行改革」「ペルー近代に関する諸問題」「アルゼンチン經濟とインフレーション」「ニカラグアの政治経済」など多彩なテーマがとりあげられ、共通論題の「國際エネルギー危機とラテン・アメリカの政治・経済」では、アルゼンチン、ベネズエラ、ブラジル、メキシコの事例が報告された。特に若手研究者の熱のこもった報告が印象的で、討論も活発であった。

ラテン・アメリカ政経學會 (Sociedad Japonesa de Ciencias Sociales de América Latina) は1964年に設立された。日本におけるラテンアメリカ研究は、戦前には移住関係、戦後は文化人類学に集中してかなりのレベルに達したが、社会科学的研究が遅れていた。そこでラテンアメリカ地域の社会科学的研究を政治・経済・法律の面から進める組織として同学会が誕生したのである。学会は毎年総会・報告大会（報告は主に機関誌『ラテン・アメリカ論集』に掲載）を開くほか、関東部会・関西部会・読書会などを通じて、日本におけるラテンアメリカ研究に大きな役割を果してきた。

これ迄入会の機会を逸し、始めて今回の研究報告を傍聴した私には、学会を批判する資格は無い。しかしあえて苦言を呈するならば、報告の内容が題と異なっていたり、報告が聞きとれなかったり、司会者と報告者の事前の打合せが充分でない場合がみられたのは残念であった。日本ラテンアメリカ學會が創立されたことで、二つの學會が並立することになったが、自然・人文・社会科学の広汎な研究をめざす本學會と、緻密な社會科学研究の場としての政經學會の活動が、相補いつつ發展することを期待したい。

V) マリアテギ没後50周年によせて 原田金一郎

ペルーはいよいよ、ラテンアメリカが今世紀生んだ最大の思想家の一人、ホセ・カルロス・マリアテギ(1894~1930)がこの世を去ってちょうど半世紀を経た。彼の主

著、『ペルーの現実解釈のための七つの試論』(1928年)は、ラテンアメリカによるラテンアメリカ社会の歴史的経済的分析の最初の著作といつてよいが、一昨年にやはり発刊50周年を迎えている。したがって、1978年ペルーにおいて発行されたマリアテギ関係の文献は8冊にのぼり、昨年は5冊であった(このうち、各年2冊は、マリアテギが創設し、現在は子息ハビエルおよびホセ・カルロス両兄弟が経営するアマウタ社から出版された)。それだけではない。たとえばメキシコでは、マリアテギをめぐる論争のなかから古典的論文を収集した『マリアテギとラテンアメリカのマルクス主義の起源』(ホセ・アリコー編、シクロXXI社、1978年)が発行され、昨年には『七つの試論』および『政治論集』がエラ社からあいついで発行された。

本年にいたって、6月メキシコにて没後50周年式典がシナロア州で開かれ、ホセ・アリコー、アグスティン・クエバなどの研究者とともに、子息ハビエル・マリアテギ博士が参加した。またタバスコ州では『マリアテギとメキシコ革命』と題する書物が出版された。前述のペルーのアマウタ社からは、没後50周年記念論文集(第1巻『マリアテギと文学』本年末、第2巻『マリアテギと社会科学』来年)が出版される予定であり、未発表の書簡集も編集途上にあるとのことである(今夏ペルーを訪問した筆者も、8月25日リマにて全国作家芸術家協会主催の記念式典に参加し、「マリアテギの著作におけるインディヘニスモとマルクス主義の合流」と題する講演をおこなった)。

このように、死後半世紀を経てようやくマリアテギの思想が注目を浴びるようになったのは、ソ連をはじめとする社会主義の混迷(第三世界におけるその威信の低下)とかならずしも無関係ではない。つまり、スターリニズムの呪縛からようやく解放されはじめた人々の目に、ラテンアメリカ土着の原住民復権思想(インディヘニスモ)とヨーロッパ社会主義思想(マルクス主義)の結合に象徴されている、ラテンアメリカ思想史上傑出した位置を占めるマリアテギの思想が新鮮なものに映るからであろう。このマリアテギの思想の「再発見」は、先ごろ日本でも定着はじめ

たA・G・フランクに代表されるラテンアメリカ「従属派」理論などに見られる「第三世界」の自立への志向が、從来いわれていたマリアテギの「異端性」が実は、ラテンアメリカの固有性にあくまでも根ざしつつヨーロッパからの近代的思想・理論をそしゃくした結果としての、「先駆性」であったことによく気づきはじめたことを意味しているのであるまい。

(参照) 拙稿「ペルーにおける共同体と社会主義——マリアテギにおけるインディヘニスモとマルクス主義」『インパクト』5号、1980年3月。

マリアテギ著、拙訳「ペルーの現実解釈のための七つの試論(I)」大阪経済法科大学『経済学論集』5巻1号、1980年6月。

(その他の国内外におけるマリアテギ関係文献については、前者の参考文献リストを参照されたい。)

vi) メキシコ留学近況報告 加藤 薫

1980年8月以来、メキシコ国立自治大学(UNAM)内にある美学研究所(*Instituto de Investigaciones Estéticas*)に研究員として在籍しております。ここには所長以下50名近いスタッフがあり、芸術に関する基礎資料の収集整理と文化交流活動を行っています。昨年8月以来、「埋葬芸術に関するシンポジウム」、「全国美術館会議」といった大きな催しや、日本人彫刻家の作品紹介と講演がありました。私自身は美術館コレクションや建築物の写真撮影、資料収集に毎日を過ごしておりますが、その他にも11月には、「死者の日」の行事の調査のためにミスキックという小村に出かけたりしています。運よく祭りの準備段階から写真を撮ることができました。

さて、11月10日から“*La ciudad : Concepto y obra*”という会議が開かれました。いずれ報告書が出版されると思いますが、ここでは会議の感想を述べたいと思います。海外からはイタリア、スペイン、米国、キューバの学者が参加し、職業別では芸術家、法律学者、社会学者等が加わるホリスティックなアプローチを試みた会議でした。都市計画の中で設計図に引かれた一本の線のために

数百年続いた民衆の共同体関係が破壊される例の多さと、大資本投下による建築物が現実に生きている都市住民の生活とは無縁なものになってゆく現状批判は、東京という例を見ている私には切実なものでした。面白かったのは常に“人民の”という“”のつく社会主義国の建築が実際には民衆の手に届かないものになっているという指摘に対し、キューバはその轍を踏まないように考慮しているという現役の建築家 R. Segre 氏の発言で、彼のスライドによる講演は様々な論議を呼びました。キューバにおける「都市化」とは我々の概念とは違い、都市生活者、学生の下放化（農村生活体験）と地方労働者の都市生活体験という人民の計画的移動を含むとのこと。こういった地方からの単純労働従事者のために都市では特に最新技法によるアパートが準備されている事を強調していました。都市スラムの問題をかかえる先進国への批判となっています。その他、古代遺跡を多くかかえるローマの現実から現代都市を考える C. Matthes 教授の講演はやはり古代・植民地時代の遺産を持つ南米の問題として聴衆には切実だったようです。

新年からの予定としては 1 月からミチョアカン、グレロ州方面に約一ヶ月かけて調査旅行をします。ラテンアメリカ 16 世紀に特有の屋外教会の存在を写真資料にするためですが、その他に大きなテーマとして植民地時代以降の芸術における古代土着時代からの影響のあり方を調べてみたいと思っています。

4. 新書紹介

○ モデスト・セアラ・バスケス著（藤田宏郎訳）『メキシコの外交政策：メキシコの国際法実践』晃洋書房、1980年。252P.

一度書いた本を数年後に改訂するというのは、なかなかに困難な仕事であるらしい。とくに社会科学系の論文の場合、その対象が何であれ、書かれた時点での国内・国際環境と時代背景によって決定的な制約をうける。今日のように変動の著しい世界にあっては、5年、10 年程度の期間内における変化が、しばしば書き手の予測をはるかに超えるほどに大きい。改訂版を成功させるには、内容を

全面的に書き改めるか、あるいはいっそ、同じテーマながら全く別のものにしてしまうほかないのかかもしれない。

バスケス教授の手になる本書は、原著が 1969 年に出版されている。しかし本翻訳書が底本としているのは、日本語版のために同教授自らが増補修正した、1974 年の原稿のことである。そして日本語訳は昨 1980 年に出版された。この本の読者がおそらく感ずるであろう当惑はおもに、それぞれ約 5 年ずつの幅で隔てられたこれら三つの時の存在を念頭におかなければならないことに由来する。一例をあげれば、訳注 22 に、「この節の記述は、1974 年 11 月現在のものであることに注意して読まれたい」という但書があるが、実はその節の記述は 1969 年のものであり、74 年に付加されたのは最後の三行に過ぎない。したがってこの節での「現在」「最近の傾向」「今日までのところ」といった表現は、1969 年頃のことなのである。読者はこうしたことを行なったことを、1980 年のメキシコと世界を頭に描きつつ読まなければならない。このような混乱と当惑の原因は、一つには、74 年の原稿が本当の意味での改訂ではなかったことによる。それというのも、著者は 69 年版の内容を書き改めるのではなく、原著の記述はほとんどそのままにして、それに 74 年までの情勢の変化を書き加えただけだったからである。ここに改訂の難しさが存在すると考えるのは、ひとり評者のみであろうか。もう一つの原因是、翻訳出版が増補からさらに 6 年後になってしまったことである。評者は訳者の勞を多とするものであるが、諸般の事情があったにせよ、かくも出版が遅れたことは、原著者自身はもとより、訳者および読者にとってもまことに残念なことであった。

本書の内容も、ここで一応紹介しておかなければならぬ。原著は、メキシコの対外政策というテーマについて、包括的な形で書かれたメキシコで初めての書物として、一定の評価がなされたものである。その証拠に、メキシコ外交についての本や論文が書かれる際に、多くのメキシコ人研究者がバスケス教授の原著を引用している。本書は一口に言って、メキシコ外交の法的制度的論考である。したがって、本質的にスタティックな外交分析で

あると言える。原著の出版からまだ12年しか経過していないが、国際関係は急速に相互依存の様相を濃くし、外交の分析も、相互作用のダイナミズムと国際システム全体の変動に焦点があてられるようになってきている。その意味で、現時点で本書を読んでみると、つい懐旧的な思いにとらわれざるを得ないが、これは致し方のないところであろう。むしろ本書は、読者に現代の国際関係における変化の急激さを示唆してくれる。それにつけても、繰返しになるが、本書の翻訳出版がもっと早い機会になされていれば、その意義ももっと深いものになっていたに違いないと惜しまれるのである。

(二村久則)

○ A・G・フランク著(吾郷健二訳)『従属的蓄積と低開発』岩波書店、1980年。

〈本書の特徴〉著者フランクは、ラテンアメリカの「低開発の発展」命題をもって、「新」従属論の代表的存在として、わが国でも広く知られている。しかし本書は、これまで翻訳紹介されてきた諸著作とは異なって、従属論への依拠が世界資本主義システム全体についてはもとより、中枢部と衛星部の内的ダイナミックの分析においてさえ、一定の限界をもたざるをえないという著者の認識の上に立って、従来の「フランク理論」に対する批判に答えながら従属論的アプローチから「世界システム論」的アプローチへ脱皮しようとする試みの一環をなしている。このため、研究対象も単に世界資本主義の内部におけるラテンアメリカの衛星的地位の析出だけに留まらず、第三世界全般の低開発の検討にまで拡大されている。恐らく著者の意図では、「世界システム論」的アプローチの中で、本書が World Accumulation, 1492-1789, Monthly Review Press, 1978.と共に世界的規模での資本蓄積過程の史的理論・実証を取り扱い、そして Crisis: In the World Economy, Heinemann, 1980. とその姉妹篇 Crisis: In the Third World が現状分析をおこなうものとして位置づけられているのであろう。

〈若干の問題点〉「フランク理論」に対する諸批判を、著者自ら①「外的交換」関係の過度の強調と「内的生産」関係の無視、②異

なった段階を通じる歴史的発展についての考察不足、③中枢部およびシステム全体の発展の分析の欠如、の三点に要約し、これらの「挑戦」に一挙に応えようとしているが、その試みは率直に言ってあまり成功していない。①については、マルクス主義の重要な諸範疇である「生産様式」や「生産関係」が、随所に全く概念規定なしにただ言葉として使われているに過ぎず、第三世界の生産諸関係の総体とその内的諸矛盾の具体的論述がほとんど展開されていない。この点に関しては、著者も自認しているように、「単に量的にだけでなく、質的にも限界がある」。②については、重商主義、産業資本主義、帝国主義の三段階区分が採られているものの、各段階における「世界システム」の特質が捉えられておらず、依然として「資本主義体制の拡張と形態変化の歴史を貫くその基本構造の連続」が平板に語られているだけという感が深い。また、王室的重商主義、ことにスペイン・ハプスブルグ王室のそれが、果して「重商資本主義」と呼べる性格を有していたのであろうか等等疑問が多い。③については、訳者もコメントしているように、中枢部と衛星部が不可分の一体をなしている世界資本主義の発展についての全般的分析が必要不可欠であるという著者の「信念」に向っての歩みが漸く開始されたばかりだと言って差支えない。

周知のようにフランクの議論は、大抵、短いスローガン的な断言をおこなったのち、一連の歴史的事例ーしばしば他の著書からの冗長な引用ーをもってそれを立証しようとしているが、本書の場合はとくに、マルクス主義の諸概念が多く用いられているだけに、著者の壮大な一般的・理論的叙述と特殊な歴史的事例とのあいだの関連性が理解しにくく、総じて説得力が欠けているように思う。さらに今後の課題として、たとえば不等価交換論にしても、不均等発展論にしても、自らの「内的」思考をもっと発展させるべきであろう。〈翻訳について〉訳者の吾郷健二氏は、長年、「フランク理論」をフォローしてこられただけあって、翻訳は原文に忠実でしかも読み易い。ただ著者の引用文を示す「」内の「」についてはもう少し工夫が欲しかった。ともあれ、本訳業が刺激となって、わが国にお

1981年度大会について

日本ラテンアメリカ学会第2回大会は、6月6日(土)および6月7日(日)の2日間、アジア経済研究所で開催する予定です。分科会を編成するために正式の報告希望をとることになりました。同封のハガキにご記入のうえ4月10日までにご返送ください。

ける開発途上地域の研究、とりわけラテンアメリカについての多角的な研究がますます盛んになることを期待している。

(木田和雄)

5. 事務局から

i) 会員名簿記載事項の修正・変更

ii) 住所、勤務先等に変更がありましたらお知らせ下さい。海外に長期滞在される場合にも、滞在先住所と合わせて、その旨御通知下さい。

iii) 会報を一層充実させるために、会員諸氏の研究活動報告、各地で開催されている研究会の案内など、お送り下さい。

iv) 著書および論文抜刷等をご寄贈下さい。会員の方々の業績を系統的網羅的に学会事務局で収集整理して保管し、閲覧のため公開したり、文献目録作成の資料にしたいと考えております。既に抜刷98点、論文集4点を受領しました。一層のご協力を願いします。

v) 1980年度会費をまだ納めておられない方は、下記へ払い込んで下さい。

- 第一勵業銀行渋谷支店普通預金口座
1262358 (日本ラテンアメリカ学会代表 増田義郎名義)
- 郵便局振替口座 東京1-13630
(日本ラテンアメリカ学会名義)

№3 1981年3月1日発行

日本ラテンアメリカ学会事務局

〒153 東京都目黒区駒場

3-8-1

東京大学教養学部第8本館

中南米分科会付

☎ 03(467)1171

内線 581